「不思議の森の住人」

熊倉晴子

5月の下旬、土砂降りの雨の中、近藤亜樹の公開制作を見に行った。この公開制作には明確なコンセプトがあって、それは「近藤亜樹というめずらしい生き物」の生態を「観察する」というものだ。バリケードのように積み上げられた段ボールの檻の間からのぞきこんで見ると、近藤はおサルのようにペイントされたつなぎを着て、頭には動物のお面を冠り、段ボールに一心不乱に絵を描いている。ときどきこちらを振り返っては、見に来た人と話しをする。それは私が今まで見た、いかなる「公開制作」にも似ていなかった。パフォーマンスとも違う。もしかしたら「巣作り」というような言葉がふさわしいのかもしれない。というのも今回近藤は、これまで発表してきた平面的なキャンバスに油彩で描くのではなく、白い段ボールの箱という立体に、アクリル絵具で描くことを試みている。段ボールを組み立て、描き、積み上げ、組み合わせ、描く。そこに生まれてくるものは作品、というよりはむしろ状況や、環境といったようなもので、絵筆を持った不思議な生き物が、自分の遊び場や住処をつくりあげているように見えたのだ。

近藤はとにかく描く。それはもう「太っ腹」に描く。非公開時の近藤の制作がいかなるものであるのかを知らないのでなんともいいようがないが、公開された制作を見ている限り、ものすごいスピードで、どんどん描く。少し目を離すと、さっきは存在しなかった新しいものがそこにある。何かを考えたり判断したりというよりは、体が反応するままに描いているように見える。

過去の平面作品にも、もちろんそのスピード感は表れていた。しかし、それは作家自身の言葉を借りれば「絵の中に新しい世界を閉じ込める」ような、物語の痕跡のようなものだった。「私が描く絵は私のものではなく、見る人が想像し楽しむためにある。」と自身が言うように、すでに出来上がった近藤の絵画があり、それは既に近藤の手を離れ、そこから見る人の想像力が始まるという関係性があった。しかし今回の公開制作では、それが今この場所で、まさに発生する瞬間を目撃することになる。それでは一般的な公開制作と変わらないのではないか、と言えばそうではない。近藤は出来上がった作品を生み出すことを目的とした制作の「過程」を公開するのではなく、多面体である箱の組み合わせによって無限に変化し、時間の経過によって増殖していく、永遠に完成することのない、終わりのない想像力のほとばしりそのものを観客に見せた。それは見る人の想像力を引きつけ、ときにはその遥か先へと進んでいくようだった。

およそ一ヶ月を予定されていたこの公開制作の会場は、５日目にしてあらゆるものが描かれた段ボールで埋め尽くされていて、そこはすでにギャラリーという空間を超えた、今まで絵の中に閉じ込められていた近藤の想像力が今まさにこの場所で現実に立ち表れ続ける不思議な場所であった。しかし、会期の最後に行われた展覧会を後日訪れると、そこには、あのめずらしい生き物の姿はなく、その場所は既に近藤の手を離れた堂々たる物語の痕跡となっていた。

美術出版社 美術手帖 2013年7月号 掲載